

REPORT

JEJAK TABI EXCHANGE SYMPOSIUM

July 14 2021

Speakers:

AGNES CHRISTINA (Yogyakarta), IBED SURGANA YUGA (Yogyakarta), MAKOTO SATO (Tokyo), SHOICHI TOUYAMA (Naha)

Moderator:

MASASHI NOMURA (Tokyo)

MUHAMMAD ABE (Yogyakarta)

報告

Jejak- 旅 Exchange シンポジウム

2021 年 7 月 14 日

登壇者：

登壇者：アグネス・クリスティーナ、イベッド・スルガナ・ユガ、佐藤信、当山彰一

モデレーター：野村政之、ムハンマド・アベ

日本とインドネシアの間につながりはあるのか、という問いがあるとしたら、当然答えは、あるということになるだろう。インドネシアのアーティストが日本で作品を発表しているし、両国のアーティストのコラボレーションも行われてきた。しかし、より具体的に、沖縄県那覇市と、インドネシアのジョグジャカルタの演劇に繋がりはあるかと問えば、無い、と答えるをえないだろう。

日本のなかでも、沖縄の芸術と文化は内地のそれとは異なるように思える。少し google 検索をしたり、パフォーマンスアーツネットワークジャバンのサイトなどすれば、沖縄の伝統芸能についての情報は得られるが、現代演劇についての情報は少ない。個人的には、日本国内の他の地域文化とおおきく異なるのは、2004 年に設立された国立劇場おきなわの主な目的が、アジア太平洋地域と沖縄の芸術をつなぐことであって、たとえば東京といった、内地の他地域の現代演劇と沖縄の演劇を繋ぐことにはない、ということにあるのではないかと思われる。

Jejak-旅 Exchange における日本とジョグジャカルタの演劇の交流をめぐるシンポジウムは、那覇とジョグジャカルタのシーンを互いに紹介するものだった。これは、Jejak 旅 Exchange の 2021 年プログラムで企画された一連のショーケースとディスカッションの一部である。日本のプレゼンターは、当山彰一（アトリエ銘苺ベース）、ジョグジャカルタからはアグネス・クリスティーナ（インディペンデントで活動）と、イベッド・S・ユガ（カラナリ・シアター・ムーブメント）、ディスカッサントとして佐藤信、そしてモデレーターとして野村政之だ。

アトリエ銘苺ベースの当山彰一がそのプレゼンテーションで語ったのは、彼がつねに内地の文化的中心である東京、横浜、京都などとの繋がりを模索してきたということだった。佐藤信も、当山のプレゼンテーションで東京と那覇の間の差を見て、もっと多くのアーティストと（必然的に内地で活動する人、ということになるのだが）交流すべきだと同意した。とはいえここまで書いてきたようなことは、東京と那覇という都市の関係について、その文化的、政治的文脈を深く解している訳では無い私の、それも一義的な感想に過ぎない、ということでは申し添えておきたい。

東京／横浜を拠点に活動する佐藤信は、自らの拠点、若葉町ウォーフの活動を通してアジアの都市を結ぶことを目標にしている。彼はこうした実践を10年以上続けていて、その自由な精神とクリエイティビティでよく知られている。佐藤は沖縄の沖縄&那覇の演劇シーンを個別に見ることよりも、個別の地域でのいわゆる舞台芸術のシーンの発展といった概念に囚われずに、広い目線で日本をはじめ、アジア各地の演劇を見ることを重視して話していた印象であった。

一方、ジョグジャカルタからのプレゼンターであったイベド・S・ユーガとアグネスも、その実践を紹介した。イベドはバリで生まれ育ち、芸術大学で演劇を学ぶためにジョグジャカルタに移り住んだ。大学の頃から演出と劇作をはじめた彼は、ジョグジャカルタの演劇コミュニティの展開と自らの活動遍歴を重ねて紹介した。彼は、ジョグジャカルタにおけるネットワークが依拠しているのは、個人のレベルにおける信頼であって、コミュニティー間の組織的な連携によるものではないことを強調した。

別のルートを通してジョグジャカルタの演劇シーンに参入したアグネスは、この都市の演劇シーンをまた別の視点から見ている。当初、彼女は自分の作品が「ジョグ者演劇的な美学」を持っていないように思われることを気に病んでいたが、次第に、一般的な観劇人口と異なるオーディエンスを見つけることができたので、それは問題ではなくなったという。ジョグジャにはあらゆる種類の芸術に観客がいるのだと気づいた彼女は、自身の作品を観にきてくれる観客をより意識するようになった。自らの創作をサポートする演劇コミュニティを作り上げたイベドと異なり、アグネスは演劇作家は独立して活動できるはずで、特定のグループに属する必要はないと考えている（これは、特に10年ほど前のジョグジャカルタでは非常に稀なことだった）

世界中に人々にとってそうなのだが、特に舞台芸術のアーティストは、昨年からのCOVID-19 パンデミックにおおきな影響を受けている。シンポジウムに参加していたアーティストは皆、ライブの観客の存在と、生身で行われるディスカッションの温かみを恋しく思っていた。那覇のアトリエ銘苺ベースのプログラムの多くは延期、またはオンライン形式への変更を余儀なくされ、若葉町ウォーフでの公演は昨年より休止している。しかし、自らのスペースを社会のために使いたいと考えた佐藤は、公演はできなくとも、誰でも出入りし使うことのできるオープンスペースとして、劇場空間を活用している。ジョグジャカルタでも状況は同様である。しかし、2020年には盛んオンラインパフォーマンスが行われていたが、今年に入ってからは、作り手も観客も、オンラインで演劇を追うのに少し疲れてしまった印象がある。また、パンデミック下でネットワーク同士がコミュニケーションをとるうえではオンライン形式は有用だが、パフォーマンスの伝達のうえでは必ずしも望ましい媒体で

はない、ということも、日本とインドネシアのアーティストの間で共有されていた考え方だろうと思う。

特にインドネシアでのオンラインプラットフォームの難しさは、オンラインのパフォーマンスに金を払い、あるいはストリーミングサービスに登録する手間を厭わない観客が少ないという点にある。こうしたサービスはまだインドネシアでは新しく、地域に根付いた映画関係のストリーミングプラットフォームなども苦戦している。多くのオンライン演劇が配信に YouTube などの無料のプラットフォームを用いていて、そうした配信が、演劇に固有の経験を提供できているとは言い難い。いくつか特筆すべきプロジェクトもある。Zoom や Google Meet を使って、オンラインパフォーマンスという概念自体を問題にしているものもあるが、多くのアーティストはやはり、単にパフォーマンスの記録映像をインターネット上にあげているに過ぎない。

演劇におけるコミュニティのあり方がいかに変わったかということも興味深い。かつては、演劇のアーティストは互いの作品をよく見合うコミュニティであったが、現状、移動は難しく、「集まり」の感覚は、コミュニケーションの手段としての「オンラインプラットフォーム」の中に閉じ込められている。当初、これは困難なことに思われた。多くの舞台芸術のアーティストが、直接会って生身で対話することに慣れていて、たとえば zoom を用いて舞台の稽古をするといったことは、非常に難しい。しかし、こうした時勢下でコミュニティの感覚もまた変容していて、テクノロジーを活用すれば、国際的、あるいは島際的なコミュニティを、寝室を一步も出ることなく、作ることもできる。

ジョグジャカルタとインドネシアに関して言えば、オンラインのプラットフォームを通して、より広範な文化的な文脈を見ることができたのは確かだ。国内の対話では扱われることの少ない事柄について、ジャワの外部に居る友人たちと話すことができた故だ。ジョグジャカルタはしばしば、インドネシアにおける舞台芸術の中心として見られるが、他の地域で活動している人と話すことで、ジョグジャの外でも多くのことが起こっているのだと、実感させられる。もちろん、オンラインでの対話は他の場所のことを知るための第一歩に過ぎず、今後さらに、お互いの活動を位置付けていくこと、交流することが求められるだろう。

日本の場合、沖縄は日本の「外部」にあるように思われる。Jejak-旅 Exchange のシンポジウム内においてさえ、たとえば佐藤信は沖縄のことよりも、ジョグジャカルタのことを知りたい、といった様子だった。¹アトリエ銘苅ベースは演劇のプログラムを持っているが、県外の団体がそこで作品を上演することは少ない。²那覇における現代演劇の実践はあまり多くないように見受けられる。一方、沖縄の演劇について調べるなかで、興味深い演劇作品に行きあたった。1978年に沖縄の劇団創造によって上演された知念正真「人類館」である。沖縄の人々に対する差別を描いた作品である。万博で人間が展示された際のことを扱った戯曲で、俳優は展示された人間たちを演じるのだ。

¹ 佐藤氏は既に沖縄のコミュニティと関わりがあるという背景があった。

² アトリエ銘苅ベースは県外のカンパニーの上演機会創出にも努めているが、現在はコロナ禍で県外からのカンパニーの公演が減り、県内中心になっている。

シンポジウムから学んだことと、自分でネット上で調べたことを総合する限り、沖縄とジョグジャカルタは実り豊かな関係を結ぶことができるのではないかと思う。類似する伝統的な文化が基盤にあり、風刺を用いた批判を好むといった傾向も似通っている。そして、ジョグジャカルタだけでなく、パプア州や東ヌサ・トゥンガラ州といった、インドネシア国内で「二級市民」のような扱いを受けている地域の芸術家と沖縄の芸術家が会う事ができたなら、東京／沖縄／ジョグジャカルタ／インドネシア東部をめぐる関係を、さらに豊かなものにすることができるだろう。将来、共に何かをつくるための共通の基盤を探るうえで、このようなことが有用なのではないかと思う。